

児童自立支援施設

喜多原だより

編集発行
鳥取県米子市泉 706
喜多原学園
発行年月日
平成 27 年 6 月 20 日



学園長挨拶

喜多原学園での25/30

喜多原学園長 馬詰 俊哉

私は、一九八三年（昭和五八年）一〇月、非常勤教護として喜多原学園に着任しましたが、これが学園との「おつきあい」の始まりでした。

翌年四月から正式採用となり鳥取県職員としての生活をはじめ、三〇年目の節目を迎えた昨年四月、園長として着任することになりました。

この三〇年間で、喜多原学園を離れたのはわずか五年でしたが、三カ所の職場を経験し、中部総合事務所福祉保健局で『心と女性の相談室』

『保護係』、中部療育園で『肢体不自由児の通園施設』、米子児童相談所では『判定保護課』等に籍を置いて、また別の角度から様々な福祉を経験し、現在に至っています。

要は、「私にとって『喜多原学園』とは、切っても切れない

関係だ。」ということが言いたいのです。「ただ長くいるだけ・・・？」と返されても返答に困るのですが、私にとってこの場所は、トラブルが多くて、多くの問題を抱え、難しい子どもたちとの対決も少なくならないけれど、それでも、時々、癒やされることや感動させられることもあつて、案外、居心地の良い場所だと思っています。

この喜多原での二五年間は、けっこう中身が濃く、喜多原学園の沿革の中でも、歴史的に最も重要なポイントで関わってきたような気がしています。

非常勤でいきなり男子寮の寮長を任せられ、園内に住み込んで、ほぼ二四時間子どもたちと一緒に生活。授業での学習指導、野球に作業活動の毎

日でしたが、木を倒して薪を割り、焚きつけを作って風呂を沸かす。寮生全員でポットン便所の肥え汲み作業。当時からそんなに辛いという思いもなく、今では、むしろ楽しかったなつかしい思い出となっています。

しかし、時代の流れと共に、学園生活の中にも大きな変化がやってきました。

■平成八年

・学校教育導入(分教室開設)。
職員との通勤交代制導入。

■平成一〇年

・児童福祉法改正 教護院から児童自立支援施設に。

・男子寮、女子寮、食堂棟、多目的家庭舎竣工。

■平成一九年

・分校開設。

■平成二〇年

・自立支援プログラム導入。

■平成二一年

・本館、体育館、プール竣工。

このような生活様式や、学習方式の大きな変化を目的

たりにして、私自身も、他の職員たちも戸惑い、そして、当然のように子どもたちも不安定な状態が続いたこともありました。

それでも、その時々職員たちが常に試行錯誤を繰り返しながら、徐々に、落ち着いた運営体制を築き上げてきています。まだまだ、完成形の喜多原学園は見えてきませんが、少しでも理想的な児童自立支援施設に近づけるよう、職員と一緒に悩み続けたと思っています。

園長に就任して、一年間があつという間に過ぎてしまいました。しかしその間、色々なことがありました。

■平成二一年

七月、久々に単独チームで出場した野球大会。一勝もできませんでしたが、元氣と明るさではどこチームにも負けておらず、最後まであきらめない姿を見せてくれて、誇らしさを感じました。

■平成二二年

十月、女子のバレーボールも、これまた数年ぶりに単独チームで出場しました。ミス

をかばい合い、最後まであきらめずに一人ひとりが持てる力を振り絞ってくれました。

十一月、駅伝マラソン大会に向け、割と早い時期から意欲を高め、しっかりと練習した甲斐があつて、みごと三位入賞、区間賞を二名の児童が獲得するという結果をもたらしてくれました。

年度末、三月になったとたん、堰を切ったように退所ラッシュを迎え、ひと月に八人の児童が退所していきました。それぞれがしっかりと成長した証を、その態度や言葉から感じ、心から祝福して学園から送り出しました。

様々な事情や環境から、喜多原学園で支援を受けなければならなくなった児童。その児童たちと正面から向き合い、ぶつかり合いながら互いを認め理解し合える関係を築き、通勤交替制という運営形態の中で、「より良い処遇」を目指して支援に取り組んでくれている職員たちには、本当に頭

がさがる思いです。

全国施設長会議で全国各地の施設長とお話しする機会を得て、各地の施設の現状を知ることができましたが、喜多原学園の職員も児童も「どこに出しても恥ずかしくないぞ。」と正直思ったものです。

しかし、私たちが日々支援する子どもたちは、年々集団形成が難しくなり、抱える問題も多様化してきています。社会のニーズにあった、子どもたちの現状を踏まえた「喜多原学園のあり方の検討」を進めてゆかねばなりません。

個別的な支援の推進はもちろん、有効な寮運営、関係機関との連携などを検討し、支援の質が維持向上できるような体制づくりへの取り組みを進めてゆきたいと思っています。

もう、喜多原学園での26 / 31 ははじまっています。「そこそこやってる」学園から、「ますますしつかりやってる」学園へと変えてゆきたいと思っています。

春 山菜採り

児童 女子

私が、ここに来て楽しいと思つたことは、みんなで山菜採りとタケノコ採りに行ったことです。ゼンマイやワラビを採りました。

はじめは、「これって、食べるだ!？」と思つてびっくりしたけど食べてみたらおいしかったし、みんなで料理ができてよかったし、みんなの仲がもっと良くなった気がしてうれしかったです。ゼンマイは、天ぷら粉をつけて揚げた食べたし、ワラビは煮たり、いためたりして食べました。タケノコは、タケノコごはんにしました。すごくおいしかったです。



スポーツ活動

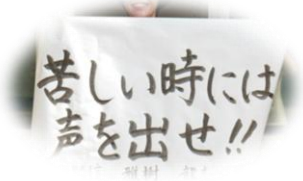
中国少年野球大会

男子寮長

内藤 和宏

私が喜多原学園に勤務し始めてから12年ほどになりですが、その間で初めて単独チームで大会に参加することができました。今までは他県の施設の子どもの合同チームでの参加や、近年は職員が試合に出てオープン参加（全勝しても全国大会には出場できない）だったので、監督としても「全国大会を目指せる!!」と意気揚々と練習を開始しました。

ただ、チームのみんなは、全国大会出場!!という目標を変えることはなく、近年にないほどの練習と、昨年度全国優勝の成徳学校の胸を借りるべく岡山へ遠征に出かけたりもしました。結果は、やはり甘いものではなく、全敗で大会を終えました。試合結果は残念なものでしたが、子どもにとっても監督の私にとっても、結果以上に得るものが大きく、次の目標に向けてやっつけていこうと感じることができた大会でした。



中国女子児童 バレーボール大会

児童生活支援員

福田 千明

私は、女子寮担当3年目で初めて監督として、平成26年度中国女子バレーボール大会に参加しました。年度当初は、入所児童5名でのスタートでしたが、幸いなことに、大会本番は7名での正式参加となりました。これまでバレー活動に参加してはいましたが、いざバレー経験のない自分が監督となると、具体的なチームのイメージを持たず、不安が大きかったです。これまで参加した広島大会、鳥取大会で、印象に残ったことを思い出すと、他県のチームの「元気さ」がありました。人数的なポリシーや、技術面でのレベルの差はもちろんでしたが、それ以上に圧倒されたのは、「子どもたち自身の活力」とでもい

うのか、とにかく一丸となつて活動を楽しんでいる、そういう雰囲気印象的でした。そこで、私の中でのチームのイメージは、「とにかく元気なチーム」となりました。幸運なことに、専門委員会を通し、他県の職員の方々からお話を聞くこともでき、自分なりに声のかけ方を考えたり、副監督と練習メニューを考えたりの日々でした。「とにかく元気なチームを」との思いは持ち続けていましたが、そううまくはいかず、現実にはお互いを高め合うような声かけをし合うにはほど遠い、どちらかといえば、縮こまったチームでした。そんな中、わかたけ学園さんとの練習試合の機会を持たせていただき、初めて他施設の自分たちと同じ境遇の子どもたちに出会い、試合をした頃から、子どもたちに変化が現れたように思います。試合は負け戦でしたが、子どもたちにとって、明確な大会のイメージを感じることができ、他県にはどんな子ども

もたちがいるのだろう、とわくわくした思いを与えてくれた貴重な機会でした。これ以降、子どもたちは「試合」を望み、執着を見せるようになりました。そして、大会当日。初監督の私にとって、思いも寄らない出来事ばかりが起きた二日間でした。まず、本番の試合の中で、どの子どもたちも今まで見せたことのないような素晴らしい集中力、プレーを見せてくれました。また、あれだけ促しても嫌々感が抜けなかったお互いへのエールやハイタッチも、自然と行っていました。私がイメージした「とにかく元気なチーム」は、実際には大会当日に一番元気で、コートの中で、お互いしか頼る者がいないこと、気持ちで負けたら終わりだということを、試合を通して子どもたち自身が吸収し、成長していったことを、どの試合も必ず二桁得点していたことが証明していました。本当に晴れがましく、一観客として、

心から応援した試合ばかりで
した。

恐ろしいことが起きたのは
二日目でした。

チームの中で唯一、大会経験
のある子どもが、腕を負傷し
て欠場となり、入所して間も
ない子どもが出場することに
なったのです。昨日健闘した
だけに、メンバーの不安は隠
せませんでした。

しかし、結果からいうとこ
こでも子どもたちの実践を通
じた成長に目を見張ることに
なります。ベテランの抜けた
チームで中心となったのは、
一番バレー練習に消極的だっ
た子どもでした。本番では、
キレのあるサーブエースを
連続で決め、聞いたことにな
いセリフでチームの皆を鼓舞
していました。それにより、
突然試合に出ることになった
新入児童も、新人とは思えな
い動きでチームをカバーして
くれたと思います。

大会結果は全敗でしたが、
私の目指した「とにかく元気
なチーム」は、本番でしっか



り爪痕を残してくれたチーム
だったと思います。また、私
自身たいへん学ばせてもらっ
たこととしては、「実践が子ど
もたちに与える活力」です。
当たり前のことですが、目指
すものが楽しいことであると
見通せていなければ、誰も練
習をしようと思えないでしょ
う。私に監督として足りなか
ったのは、子どもたちに楽し
い見通しを、たくさん伝えて
あげることだったように思い
ます。本番当日、子どもたち
自身が「楽しい」「もつとした
い」と感じることで、めきめ
きと成長していった姿に、し
みじみとそう振り返ります。

バレー大会を
振り返って

児童 女子

秋にバレー大会に行きまし
た。結果は負けでした。でも、
みんなで頑張つて連取して気
持ちを一つにして試合できた
と思いました。

学校の先生たちに練習に來
てもらって、レシーブを集中
してやったり、試合っぽくし
たりしてすこしでも多く相手
に返せるように練習しました。
試合の後は、みんなでご飯
を食べて楽しかったです。負
けたけど一生懸命できるだけ
の力は出せたと思ったので悲
しくはなかったです。でも、
くやしきはあるのでそれはこ
れからにつなげていけたらと
思います。

中国地区 児童駅伝・マラソン大会

男子副寮長
藤原 敦

平成二十六年十一月七日に
岡山県立大学にて第十四回中
国地区児童駅伝・マラソン大
会が開催され、駅伝の部に五
人(一チーム)、マラソンの部
に四人の児童が参加しました。
この年に島根で行われた夏の
野球大会では、奮闘しました
が中国五県の中で一勝もでき
なかった悔しさもあつたため、
この駅伝・マラソン大会は「野
球大会のリベンジ」として、ま
た二人数が少ないわりには速
いチームだと思わせること」
を目指して、夏の終わり頃か
ら声かけをしていました。普
段の練習では、走ることが苦
手な子や自信が無くて本気を
出すところを周囲に見せたが
らない子もいました。職員
も一緒になってタイムを計り
続けていたことで、大会が近
づくにつれてそれぞれが自分
の目標タイムを意識できるよ
うになっていました。その結
果、マラソンの部では最初2
kmを走れなかった子も自己ベ
ストを更新し、駅伝の部では
オーブン参加を含めた全十三
チーム中で五位、中国五県の
九チーム中では三位、区間賞
が二名、という素晴らしい成
績を残すことができました。
次回はわが鳥取県での開催と
なります。新年度となり新た
なメンバーとなりますが、ホ
ーム開催ということでまた秋
頃には皆で盛り上げていき
たいと思っています。



平成二十六年十一月七日に
岡山県立大学にて第十四回中
国地区児童駅伝・マラソン大
会が開催され、駅伝の部に五
人(一チーム)、マラソンの部
に四人の児童が参加しました。
この年に島根で行われた夏の
野球大会では、奮闘しました
が中国五県の中で一勝もでき
なかった悔しさもあつたため、
この駅伝・マラソン大会は「野
球大会のリベンジ」として、ま
た二人数が少ないわりには速
いチームだと思わせること」
を目指して、夏の終わり頃か
ら声かけをしていました。普
段の練習では、走ることが苦
手な子や自信が無くて本気を
出すところを周囲に見せたが
らない子もいました。職員
も一緒になってタイムを計り
続けていたことで、大会が近
づくにつれてそれぞれが自分

一年間を振り返って

教頭 吹野 健一

「教頭先生、お肉が焼けました。」

観桜会での生徒のこの言葉から、いずみ分校での生活が始まった。桜の木の下で、温かく迎えてくれた生徒の言葉だった。退所してからも落ち着いた生活を続けるため、学校で何を指導していかなければならぬのか、進路をいかに保障していくのか、考え続けてきた一年だった。先ほどの生徒は、一年後は残念ながら希望の道に進めず就職となった。進路指導の難しさを痛感させられた。

学力を保証しなければならぬのは第一だが、進学先の高校や就職先でトラブルが起った時、くじけて辞めてしままいそうになる者が多い。困難にぶつかってもそれを乗り越えていける力を、どのようにして身につけさせるのか課題だった。

愛情を持って接しておられ

る学園の職員の方や分校の教員に対して徐々に心を開き、授業へも集中して取り組みだす。しかし、大多数の生徒に学習空白があり、じつと椅子に座っていることができない。一斉学習や個別での学習をまじめながら、興味をひく授業を心がけても、不応を起し、反発することもある。

そうした中で、分校と学園の職員が情報を共有しながら共同歩調を取っていくことの大切さを感じさせられた。お互いの得意なこと不得手なことを認識し、授業や放課後活動に相互に乗り入れていくことにより、生徒理解も進み、自分を取り巻く大人が同じ方向で指導しているという安心感を持たせられる。それが、生徒が変容していく大きな原動力となってくる。また、転入した際の頃は、「情」が通じない生徒が多く、どのように指導していくのか迷ったが、

結局は「情」であった。外部に対して閉ざされた心が解きほぐされ、笑顔が増えていくのを見て、強く思った。

三年生を担任して

教諭 西山 正一

いずみ分校に赴任して1年が経過した。昨年のこの時期、満開の桜が美しかったことがつい昨日のように思い出される。

昨年は三年生を担任させていただいた。生徒は1クラス6名。一般的な感覚では少ない人数だが、いずみ分校としては大人数である。6名の生徒たちはあいさつをよくするよい子たちだった。あいさつ、言葉づかいといった基本的な生活マナーは寮生活でよく訓練されているなど感じた。

いずみ分校は私にとって7

校目の中学校である。それぞれの学校で3年生を担任し、進路指導も数多くしてきた。一般的に進路指導では本人の将来の希望と学力とを勘案して進路先を考え、アドバイスすることが多い。しかし、いずみ分校での進路指導はそれらの条件に加え、本人の家庭事情が加わる。退所先として考えられるのは家庭、里親、養護施設、その他の施設だが、どこに退所していくかにより生活の本拠地がまったく異なる。高校進学の場合、本人の生活の本拠地から通学可能な高校を考えなくてはならない。

西部出身の生徒が退所して西部の施設で生活するとは限らないのである。10月あたりから学校説明会、入試説明会といった会があちこちで開かれるようになる。あらゆる可能性を考え、こういった会にはできるだけ出席し、情報を得るようにした。

6名の生徒たちのうち1名は9月に退所した。そして残った5名の生徒たちの進路を

考える時期になった。2名の生徒は家庭復帰することが決まった。残る3名は退所先が施設の予定だった。3名のうち2名は11月中旬ごろに施設が決定した。しかしあと1名は12月末になっても施設が決まらなかった。日々不安と戦っている生徒の顔を見るのがつらかった。施設が決まらないうちに寮のある高校に進学してはどうかと勧めてみた。その学校のOBに来てもらい、話を聞く機会を設けた。冬休み中に学校見学に連れて行き、教頭先生に学校を案内していただいた。そして、本人がここに進学しようと決心した頃ようやく退所先の施設が決まった。

平成26年度 喜多原学園の1年間



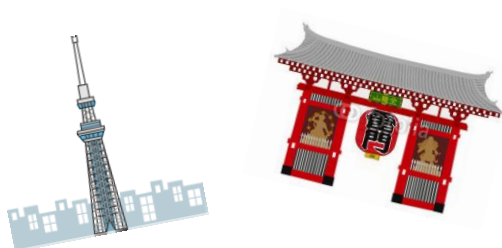
4月 観桜会



4月 遠足(花回廊)



6月 修学旅行(東京)



4~8月

- 4月 着任式 観桜会 始業式 遠足
- 5月 芋の苗植え交流(こたか保育園)
- 6月 園遊会 修学旅行
- 7月 中国少年野球大会(出雲)
フェール開き 終業式
- 8月 保育交流(こたか保育園)



8月 保育交流



6月 園遊会



7月 少年野球大会

9～12月

- 9月** 始業式
- 10月** 大山登山
フットサル交流会
中国女子バレーボール大会
- 11月** 中国児童駅伝・マラソン大会
車椅子バスケ交流会
草すべり交流(こたか保育園)
- 12月** 終業式



10月 大山登山



10月 フットサル交流



10月 バレー大会



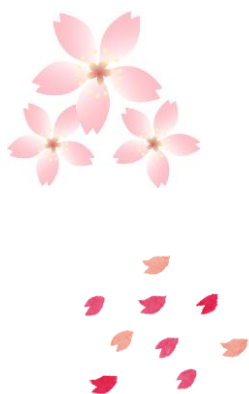
11月 草すべり交流



11月 駅伝大会



2月 スキー教室



3月 卒業を祝う会

1～3月

- 1月** 始業式
- 2月** スキー教室
- 3月** 卒業を祝う会
卒業証書伝達式
終了式 離任式

駅伝大会の思い出

児童 男子

僕は、この大会で区間賞を取りました。

去年の秋、駅伝大会がありました。駅伝大会の日までの練習は、2 km コースを毎日走りました。雨の中、競技場でタイムをはかったこともありました。僕は陸上経験があったので『2 km くらい簡単じゃん』と思っていたのですが、実際にはなかなかペースがつかめず、練習ではとばしすぎで途中でスピードが落ちたりしました。僕は『このままだったらほかの駅伝メンバーに迷わくをかけてしまう』と正しい、とばしすぎないようにしました。

駅伝大会本番の日はすごい緊張しました。まわりはみんな速そうで、抜かされたらどうしようと思うっていました。

駅伝大会がはじまりました。



1 走目は先輩が7位くらいで帰ってきて、次の人は5位で帰ってきました。3 走目だったのでタスキを受け取りました。結果は、やっぱり本番でも、とばしすぎたけど、誰にもぬかされずに同じ順位のまま次の人にタスキをわたせたので良かったです。

そして閉会式の時、自分が区間賞だと知ってうれしかったです。来年も区間賞を取りたいです。

学園の取り組み

地域交流行事

フットサル交流会

児童生活支援員

遠藤 翔吾

喜多原学園は、県内で活動している団体や保育園などと様々な交流を毎年行っています。交流内容は、球根植えやレクリエーションなど様々ですが、その中でも昨年男子寮が最も盛り上がったのがなんと、いってもフットサル交流会！ サッカーやフットサルが大好きな児童が多かったこともあり、他の児童福祉施設や少年非行防止サポーター、さらには社会人フットサルチームなど様々な相手とフットサル交流をしました。試合はもちろん真剣勝負！ 時には相手とぶつかり転倒する事もありましたが、「大丈夫ですか？」「すみません。」などと声をかけ合い自然とコミュニケーション

フットサル交流会の終了時に、職員が「じゃあ終わりの挨拶を・・・A君一言お願いします。」と指名したところ、A君が「今日は僕たちと交流してくれてありがとうございました。とても楽しかったです。また機会があったらよろしくお願いします。」と落ち着いた様子で交流相手に向け話していました。実はA君、人前で話すことがとても苦手で、これまで同じような場面で黙って何も言えないことばかりでした。交流会後、職員から「A君最後の挨拶すごい上手だったよ！」などと声をかけられ「いやあ、いきなり当てられてほんとビックリしました！でもなんか言えちゃいま

した。」と照れながら話す姿がありました。A君の成長が感じられる一場面となりました。興味があるスポーツを通して、意欲的に活動することで、体を動かす事の爽快感を味わうだけでなく、礼儀やマナー、コミュニケーションといった社会性を向上させる機会にもなっているようです。

個別支援 LST

児童自立支援専門員

奥田 麻菜

喜多原学園では、LST ライフスキルトレーニング・・・子どもが担当職員と一緒に計画を立て、月に一度、自分の好きなことを楽しむための時間を作り、その過程と実施の中で生活する力を高めます。内容は子どもによっても異なります。内容は子どもによっても異なります。CDをレンタルしたり、釣りに行ったり、お菓子を作ったり・・・やり

たいことは山ほどあるけど、時間もお金も限られているのは世の常なわけで、それで悩むのは子どもも同じです。LSTが近づくとも電車片手に自分のプランが予算内でできるのか何度も確認をする子どもも少なくありません。「これ買ったら、あれは食べられないし・・・じゃあ、こつちを来月まで我慢して・・・」と試行錯誤しながら、自分の時間の使い方を勉強しています。

そして、LSTは主に担当職員と一対一で出かけるので普段聞いたことのない話が聞けたり、寮の生活とは別の顔が見えたりして、新しい発見があるのも子どもにとってはもちろん、一緒に行く職員も楽しい時間です。

LSTで身につけた時間の使い方や楽しみのために何かを我慢するということは、今後もし生かしてほしい力だと思っています。

園遊会

～年に2回のおもてなし～

喜多原学園では、年に2回「園遊会」という大きな行事を開催します。この「園遊会」の目的は、日頃お世話になって通っている方達に、おもちを伝えることと感謝の気持ちを伝えることです。園遊会というのには、喜多原学園の子ども達にとつては発表会のようなものです。時には、学校で学習してきたことを発表する場となったり、余暇時間に練習したバンドやダンスを披露する場となったりします。その中でも一番大きな発表は、来園してくださったお客様のために、子ども達が模擬店の店員となり、一生懸命接客をする姿を見せることです。「どんなお店を出すのか」「どうやってお客様がた玉商品を何にするのか」「どうやってお店のピーアールをしようか」等、子ども達が中心となり準備をします。当日は、忙しそうにしながらも、家族や学校の先生等、知っている人を見つけると、照れ笑いをしながらも接客する子ども達の姿があります。園遊会は、子ども達の成長した姿をたくさんの人に見てもらえる機会となっています。私達職員も、園遊会での子ども達の姿を通して、「こんなに気遣いができるんだ」「こういうことが得意なんだ」「こんな姿も見せるんだ」と子ども達の「初めて知る一面」を発見することが出来ます。準備から片づけまで大変ではありますが、全員で協力してやるからこそ達成感を感じることが出来ます。近年は来園してくださったお客様にアンケートを書いてもらっています。子ども達は、自分のお店のことや発表のことが書かれているものを

見つけると、とても喜んでくれます。園遊会にご来園していただいた際には、ぜひ子ども達に話しかけてみてください。きっと、照れながらも精一杯のおもてなしを見せてくれると思います。皆様のご来園をお待ちしております。



〈H25 後援会会員〉 ※敬称略・順不同

竹内裕美（喜多原学園 OG） 近藤 明（喜多原学園前園長）
 山田政則（喜多原学園 OB） 馬詰俊哉（喜多原学園 OB）
 塩見 隼（喜多原学園 OB） 内藤佐弥子（喜多原学園 OG）
 永田博文（喜多原学園 OB） 山本大樹（子育て王国課長補佐）
 松本安司（喜多原学園前園長） 小坂靖夫（淀江中学校）

〈H26 後援会会員〉

山田政則（喜多原学園 OB） ※敬称略・順不同
 永田博文（喜多原学園 OB） 松永芳久（喜多原学園前園長）
 山本宗伸（喜多原学園 OB） 松本安司（喜多原学園前園長）
 遠藤拳人（喜多原学園 OB） 中川正純（喜多原学園前園長）
 和田俊介（喜多原学園 OB） 太田雅博（後援会会長）
 須崎 卓（後援会監事）

〈H25 寄付者〉 ※敬称略・順不同

太陽日酸エネルギー中国株式会社
 上森英史（備中屋本店）
 米子保護区保護司会
 米子市更生保護女性会
 大高公民館

〈H26 寄付者〉

太陽日酸エネルギー中国株式会社 ※敬称略・順不同
 上森英史（備中屋本店） 鳥取市国府町更生保護女性会
 米子保護区保護司会 山田政則（喜多原学園 OB）
 米子市更生保護女性会 松永芳久（喜多原学園前園長）
 大高公民館 堀田石油株式会社

〈 職員の異動 〉

（平成26年4月1日付）

退職 園長 松永芳久
転任 児童自立支援専門員 上田美佳里（中部療育園児童指導員）
 児童生活支援員 大森淳（皆成学園保育士）
着任 園長 馬詰俊哉（米子児童相談所 判定保護課長）
 児童自立支援専門員 奥田麻菜（新規採用）
 児童生活支援員 遠藤翔吾（皆成学園保育士）
 現業技術員 木村仁（西部総合事務所県土整備局現業技術員）

（平成26年12月10日付）

転任 次長 田中進 米子児童相談所 相談課 課長補佐

（平成27年4月1日付）

退職 児童生活支援員 矢間 明恵
転任 係長 加藤宗
 （西部総合事務所福祉保健局係長兼身体障害者福祉司兼知的障害者福祉司）
 係長 森脇美行（総合療育センター係長）
 係長 齊藤恵子（西部総合事務所福祉保健局保護課係長）
着任 次長 山本宗伸
 （西部総合事務所福祉保健局係長兼身体障害者福祉司兼知的障害者福祉司）
 係長 保坂葉子（保育専門学院）
 児童自立支援専門員 尾澤理子（米子児童相談所児童指導員）
 児童自立支援専門員 大石紗希（新規採用）
 児童生活支援員 中田力登（皆成学園保育士）
 現業技術員 中嶋史（西部総合事務所米子県土整備局現業技術員）



編集後記

今回 No.66号と No.67号の合併号となったことを心よりお詫び申し上げます。
 編集に当たりまして、学園の取り組みをまとめる中で、子どもたちと一緒に過ごした日々を振り返り、一緒に笑い、悩み、喜び、成長できたことを嬉しく思います。私たち職員も、よりよい支援ができるよう、日々努力していきたいと思っております。
 また、日頃お世話になっている地域の皆様、学校の先生方、関係者の皆様に学園職員一同、深く感謝申し上げます。今後とも御支援、御協力いただきますようよろしくお願いいたします。

平成26年度 児童の入退所数

項目 月	入所		退所		初日在籍者数		学齢別初日在籍者数		
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	小学生	中学生	中卒児
4	0	0	1	0	10	5	0	11	4
5	0	0	0	0	9	5	0	11	3
6	0	0	0	0	9	5	0	11	3
7	0	0	0	0	9	5	0	11	3
8	0	1	0	0	9	5	0	11	3
9	1	1	1	0	9	6	0	12	3
10	0	0	0	0	9	7	0	13	3
11	0	0	0	1	9	7	0	13	3
12	1	0	1	0	9	6	0	12	3
1	0	0	0	0	9	6	0	12	3
2	0	0	0	0	9	6	0	12	3
3	1	1	4	4	9	6	0	12	3